

『理科の教育』1961年8月（東洋館出版社）

テレビ科学番組雑感

矢口新

テレビができてから、科学が一般家庭に心やすく出入するようになった。とにかくよいことである。科学に弱いのは日本人の特徴みたいなものであるから、尋常一様では、そんなものにふれようとしなさい。そういう所で出版なんかで科学を普及しようとしても、土台無理な話である。テレビだとその点は何割かましである。しかしテレビでも、むずかしい科学ものになると、なかなかダイヤルを廻そうとしなさい。NHK 第二の科学ものなど、見たいと思っても、家族の者に遠慮しなくてはならぬ。そういった雰囲気である。だから科学ものは、テレビの威力をもってしても、なかなか家庭にまでは入りこめないことは確かである。けれども、テレビにはやはりなんだかんだといっても、いつの間にかもぐりこんで来ているといったところがある。なかにはコマーシャルにも気のきいたものがある、多少なりとも科学的雰囲気をかもし出す。まあその辺が、日本のわれわれ級の家庭の科学的レベルかも知れない

「くらしの手帖」という雑誌が、実用的でかつ科学的な記事をのせるので、なかなか評判がよいようであるが、これとでもどこまで普及しているものであろうか。やはり一部の層であろう。しかし、実際生活の中の道具などを、科学的、実証的に分析したり、しらべたりしている点の一つの行き方であろう。正面から科学ものといったテレビの番組よりも、実際生活のちえといったものがどうもとつきよいようである。NHKは比較的そういったものが多く、また午前中家庭の主婦が見る番組の中に多いようであるが、こういうものが、子どもを育てる母親に見られることはよいことだと思う。科学的な考え方とか態度といったものは、今の学校の教育や教科書をよむというところからは生まれえないのではないか。日常の生活を自然に科学的に見られるようになることがたいせつなことであって、そういう雰囲気をつくりあげるのは、しかつめらしいものではないであろう。まわり道のようにだが私は、そういったものが、見る人にも自然に見られるようになることがよいと思っている。

子どもむきの科学番組も、学校のものより、夕方の子どもの時間に出てくるものが、子どもの自発的な興味をひいているように思われる。いつか私が小学校であるクラスの子どもに聞いたら、割に面白いという答えが多かったようである。その理由はどこにあるのかはよくわからないが、一つは授業時間というかたくるしい環境で見ると興味をそぐということがあつらしい。またその中味もやはり学校放送のほうはかたくるしいと感ずるらしい。いろいろと理屈が出て来るからという子どもがいたが、やはりそれだけ学習的だから、興味をそがれるのかも知れない。子ども

にあまり理屈をいわないで、ナチュラルに科学の世界で遊ばせるものもいいのではないか。母親に日常生活のチェを与えるのとおなじようなものがあるのはよいことだと思う。

学校放送用の科学ものは、正直のところ私は中途半ばであまりよいとは思わない。いろいろ工夫していることは認められるが、それでも、あれを授業時間中に見ると、また新しい先生が出て来て、授業の中で授業をやっているように思うことがある。見るほうもはっきり態度をきめる必要がある。授業とは全然切りはなすというほうがどうもよいように思う。研究授業などで、テレビを使った授業などというのを見るが、そのようなことは、おそらく研究授業の時だけしか行えないのではないか。

そのことがまたつくるほうにも影響しているようである。授業というものを頭におかないでつくったらどうかと思うことが多い。

授業を頭におくと、授業としてのはじめとおわりが必要になって来る。そういうことがつまらないことのように思われる。私は、たとえばもっと極端にクイズ式のものでもよいように思う。あるいは、もっとギューギューと考えさせるようなものでもよいように思う。たとえば、起き上がりこぼしは下におもりがある、それがすわりがよい理由だといった、本にもあるような説明でなく、いろいろな器や箱やビン、高さがちがい、底面の広さがちがい、また形がちがうものでどれがすわりがよいかを考えてみる。だんだんに条件をむずかしくするとしまいに分らなくなる。それでおしまいといったギューギューと問いつめるものがあってもよい。どうせ考えるなら、うんと考えさせたらよいのではないかと思う。自然科学とは、そんなに簡単なものではないのだから、むずかしい面もあってよいと思う。

〈 国立教育研究教育内容研究室長 〉